2025年（令和7年）今後の考え方。

社会福祉法人明澈会
理事長　上薗　昭二郎

昭和50（1975）年 前理事長・園長上薗敏子48才の時に鹿児島県児童家庭課（当時）の職員を辞して今日の礎を作り上げました。前身の法人に措置費の不正使用があり、**澈**（水が澄んで鏡のようなさま）を用い、子どもにとって明るく、「何でもお見せします」との意思からこの名称にしたとのことです。当時のあまりに劣悪な子ども達の様子にも驚き、その2年後に、日本自転車振興会（現在のJKA）補助と借入をして、知覧町（現在の南九州市）松山に全面建替移転を行いました。更に、当時発足して間もない「小舎制養育研究会」に、唯一の大舎制の施設として団体会員となり、施設の小規模化を模索し、平成18（2006）年度には自転車振興会（JKA）の補助を得て、鹿児島県で初めて小舎型（二軒長屋方式）ホームでの養育と自立支援・地域の子育て支援を目的に、南さつま市に全面建替移転を行いました。平成22（2010）年83才で亡くなるまで、36年間施設に住み続け、一億円以上の私財を投じて子どもの養育に取り組んできました。

この歴史を前提に、私たちが大切にしていることは、「食事と生活リズム、そして子ども達にやさしくすること」です。子どもの心痛みがひどくなっており、心理的虐待の深刻さが大きな問題感じる日々の中で、この方針は最も大事なことだと考えています。

体罰がない。職員の怒鳴り声が聞こえない。この結果が、子ども同士の暴力がほぼないと言い切れる状態を作りだしていています。

私は、「暗いと不平を言う前に、進んで明かりを灯す人になりましょう」という言葉を大事にしてきました。影で不平や不満を言うのではなく、会議で言えば意見となります。

そして、具体的な提案があれば明かりを灯すものになるでしょう。

子ども達の状態が年を追うごとに心理的な傷が深くなっています。子ども達にとって大人は信じられる人であるように一緒にこの仕事をつくりあげて行きましょう。

今、子どもと家族の支援センター・児童家庭支援センター・里親支援センター等地域の支援に向けて取り組んでいます。

世界の趨勢は、虐待が起きてから対応するのでは無く、地域にある家族をどのように支えて行くかが流れてとなっています。一方我が国は、英国の40年ほど前の制度にようやくたどり着こうとしています。子ども権利のお手本のような英国には社会的養育において1960年代ごろまで深い闇がありました。この闇があって今日があることを認識してください。本来であれば、40年前を今やるのでは無く、今やっていることに追いついていかなけらばならないと考えています。

今後、地域の支援を考えるときに、入所型の施設の縮小とソーシャルワーク実践ができる職員が求められます。南さつま子どもの家はこうしたことの準備をすすめて行こうと考えています。

皆さんの力を是非ともお貸しください。